

I 研究の概要

研究主題と副題

自ら学び、自ら考え、生き生きと表現し合う児童の育成<国語力向上>
～言語活動の具体化とラーニングスキルの習得を通して～

主題・副題設定の理由

(1) 社会的背景から

グローバル化と急速な情報化や技術革新による人工知能（AI）の飛躍的な進化など、社会や生活が大きく変化している今、教育の在り方も新たな事態に直面している。平成27年8月に示された中教審による学習指導要領改訂における論点整理では、「社会に開かれた教育課程」を実現するという理念のもと、学習指導要領等に基づく指導を通じて子どもたちが何を身に付けるかを明確にしていく必要があると示している。そのために「何ができるようになるか」を核として「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の視点で学習指導要領を改善していく必要があると示された。

これを受け、学習指導要領改訂の方向性では、「何ができるようになるか」について「生きて働く知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」を三つの柱として示した。そのために教育課程の実施においては「どのように学ぶか」を重視し、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点から学習過程の改善を行うことが必要とされている。それにより学校における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるような児童の育成を目指している。

また、国語科の新学習指導要領においては、「主体的・対話的で深い学び」における「深い学び」を考える鍵として「言葉による見方・考え方」が必要であることを示している。言葉への自覚を高め、「言葉による見方・考え方を働かせ」ることが、国語科において育成を目指す資質・能力をより良く身に付けることにつながる事となる。これを踏まえ、言葉そのものや、言葉を通じて学ぶための学習内容の改善・充実、授業改善のための主体的な言語活動の創意工夫などが今回の改訂の要点として挙げられ、これからの国語科の学習に求められている。

(2) 学校教育目標から

本校では、学校教育目標「すすんでまなぶ子 たすけあう子 げんきな子」のもとに、①学力の向上 ②やさしい心の育成 ③健康な体づくり ④地域との連携強化を4つのプロジェクトの柱として、知・徳・体・コミュニケーションの調和のとれた教育課程の編成・実施により、地域に誇りを持ち、様々な問題に対して意欲的に、仲間と互いに助け合いながら、生涯にわたって学び続ける児童の育成に努めている。

さらに4つのプロジェクト実現のための25のプログラムでは、「学力の向上」について1基礎学力の定着 2書く活動を重視した思考力・表現力の向上 3日々の授業による主体的・協働的な学習の定着を重視していくことにより、児童の「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指している。

(3) 児童・保護者・地域の実態から

本校は北区にあり、警察学校、自動車学校、大宮ろう学園などの施設が学校を取り囲んでいる。また、大型ショッピングモールも近く、周りには大きなマンションが建ち並んでいる。最大の特色としては、学区には国際的にも注目される盆栽村があり、伝統文化としての盆栽教育を教育課程の中に取り入れるなど、特色ある学校づくりが行われている。今年4月に開催された『世界盆栽大会』では、盆栽を展示するとともに、代表児童は子ども盆栽大使として式典にも参加した。

地域や保護者の方々は子どもへの関心が高く、教育に熱心であるとともに、子どもたちが安心・信頼できる環境のもと、確かな学力を身に付け、心身ともにすこやかに育ってほしいという願いをもっている。ボランティア活動も大変充実しており、盆栽ボランティアを始め、学習支援ボランティア、図書ボランティア、ソーイングボランティアなどの活動も活発に行われており、日々の学習活動においても多くの保護者が学校に関わり、子どもたちの学校生活を支えてくれている。

子どもたちは、明るく素直で学習に対してまじめに取り組み、知識が豊富な児童も多い。全国学力・学習状況調査の結果を見ると、一般的に基礎学力の定着が図られている。しかし、思考力・判断力・表現力においては個人差があり、主体性に欠ける面もある。

そこで、平成27年度より国語科の研究に取り組み、アクティブ・ラーニングに基づく主体的で協働的な学びの実現に向け、児童による授業の司会・進行、モデルの提示、PWCシートの工夫と充実、言語活動の具体化、学習形態の工夫などに重点を置き、授業実践を行ってきた。平成28年度からはさいたま市教育委員会の研究推進校（国語力向上）と埼玉県国語教育研究会の委嘱をうけ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善に取り組んでいる。

(4) これまでの研究から

前掲の社会的背景や学校教育目標等を踏まえ、平成28年度から、さいたま市教育委員会の研究推進校（国語力向上）の委嘱をうけ、「自ら学ぶ力や思考力を発揮して、生き生きと学び合う児童の育成～言語活動の具体化と主体的・協働的な学習を通して～」をテーマに、研修を行ってきた。その成果として、児童が見通しをもって学習に取り組むことができるようになり、児童による司会・進行で進める授業が本校の学習スタイルとして定着した。グループ学習においても司会を中心に考えを交流し学習を進めることができるようになってきた。また、パーソナルワーク→グループワーク→クラスワークという学習形態を自力解決過程として単位時間に位置づけることで、自分の考えをもつことができる児童が増えた。

一方で、「友達との交流を通して自分の考えを広めたり、深めたりすること」については課題が多く、友達と話し合うよさや求める対話の姿を明確にしていくことが必要だと考えた。また、「自分の思いや考えを書くこと」に対して苦手意識を持っている児童が多いため、思考を可視化して書くこと、さらには国語の学習の要となる「言葉による見方・考え方」を一層重視していくこと、また学習全体を支える力としての語彙力についてもさらに高めていく必要があると考えた。

これらの課題を受け、今年度は研究主題を「自ら学び、自ら考え、生き生きと表現し合う児童の育成」を設定し、副題を「言語活動の具体化とラーニングスキルの習得」とした。国語科を中心として日々の授業改善を行っていくことで、国語力向上を目指すとともに、児童の「主体的・対話的で深い学び」にせまっていきたいと考える。